群教セ	E03 － 03
	平 17.227 集

他文化共生を目指した国際理解学習の工夫

── あいさつ言葉の創造を通して ──

特別研修員　　髙柳　信道　（前橋市立広瀬中学校）

《研究の概要》

本研究は、様々な文化をもつ生徒の共に生活しようとする態度を育成することを目指したものである。具体的には、総合的な学習の時間の中の国際交流にかかわる学習や道徳の時間を通して、分かり合おうとする思いや思いやりの心を再確認し、深め、さらに、外国人生徒が在籍する本校の実態を生かして、独自のあいさつ言葉の創造に焦点を当てた参加体験型の学習活動を設定することで、多文化共生のための態度化を図る活動を行った。

キーワード　【 国際理解　共生　国際交流　異文化教育　人権教育　外国人教育 】

Ⅰ　主題設定の理由

本校は全校生徒数 206 名中、外国人生徒が 26 名と、全校生徒の 10%強を占める中学校である。年度途中での編入学もあり、平成 16 年度には、ペルーと中国より計２名の編入学があった。

こうした本校の問題として、日本人生徒と外国人生徒との間に見えない障壁が存在し、互いの存在を疎外している様子が見られる。特に、編入学後の外国人生徒が「日本人生徒が私を避けている。友達がいなくて寂しい。」と訴えることが多い。日本人生徒に確認すると、いろいろと手助けしている者がいる一方で、言葉が伝わらないために会話をあきらめてしまったり、あまりかかわらないようにしたりしているという生徒もいた。こうしたことから、外国人生徒が孤立した状況となり、学校生活が消極的なものになり欠席が続くという悪循環が生まれている。

このような見えない障壁を解消し、様々な文化をもつ本校生徒が、共に思いを通い合わせながら、集団生活の向上のために協力し合おうとする態度で学校生活を送るためには、互いの違いを問題視せずに、積極的に共に一つのことにかかわったり、思いを素直に表現し合ったりできることが重要であると考える。特に、多数を占める日本人生徒がこのような意識をもてれば、外国人生徒はより積極的な学校生活を送れるのではないかと考える。

外国人の定住化が進むなか、見えない障壁をなくし、日本人と外国人とが共に生活していくことは日本社会の今日的課題でもある。この課題の解決には、これまでの交流を中心とした国際理解教育に加えて、異文化理解、さらには他文化共生を目指した、より積極的な国際理解教育が必要と考える。本校の課題解決の手だてを探ることは、この日本の今日的課題解決にも役立つものと考える。

そこで、本研究では、総合的な学習の時間の中の国際交流にかかわる学習や道徳の時間を通して、誰もがもっている、分かり合おうとする思いや、思いやりの心を再確認し、深め、さらに、本校の実態を生かして本校独自のあいさつ言葉の創造に焦点を当てた人権教育の参加体験型学習を設定することで、共生のための態度化を図る。このような活動を通して、多文化共生を目指し、様々な文化をもつ本校生徒の共に生活しようとする態度を育成する国際理解学習の工夫の在り方を明らかにしていきたいと考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

総合的な学習や道徳の時間において、国際交流学習、思いやりの心を深める学習、多文化共生のための方法を工夫する学習を進めることにより、様々な文化をもつ生徒が思いやりの心をもって共に生活しようとする態度を育成する国際理解学習の在り方を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　総合的な学習の時間において、言葉の通じないアジア各国からの留学生と交流会を実施し、遊んだり、日本やアジア諸外国の文化や生活習慣等を学んだりすることを通して、国際交流に

大切なのは言葉よりも、分かり合おうとする思いであることを理解できるであろう。

2　道徳の時間において、外国人や外国の様々な文化に触れる日本人と、日本人をもてなす外国人の姿から、世界中の人々に人間愛の心があり、それを大切にして他者とかかわっていく心を深めることで、互いを思いやろうとする意欲が高まるであろう。

3　総合的な学習の時間において、人権教育の参加体験型の学習活動を利用し、日本人生徒と外国人生徒とが協力して、言葉や文化の異なる自分たちにふさわしいあいさつ言葉を考えることにより、言葉や文化の違いを超えて、互いを思いやりながら、学校生活の中で共に生活していくために進んで工夫しようとする態度を育成できるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)「多文化共生」「共に生活しようとする態度」について

「多文化共生」とは、異なる文化的ルーツをもつ複数の集団が、一つの社会の中で、互いを深く理解し尊重し合うことによって、共に民主的な社会を構成するという考え方である。本研究では、まず、言葉や持っている文化的背景は違っても、気持ちを伝え合うことができることや、その気持ちの根底には人間が根本的に有している思い、他を思いやる心があることを学ぶ。さらに、その思いやりの気持ちを基にして、共に生活していくための方法を工夫する学習を行うことで、多文化共生を目指していきたいと考えた。

また、人間は皆、自分と同じように他者を大切に思う「思いやりの心」をもっている。この「思いやりの心」を根底として、日本人生徒同士も含め、様々な文化をもつ生徒が、「思いを通い合わせながら、集団生活の向上のために協力し合おうとする態度」を、「共に生活しようとする態度」ととらえた。

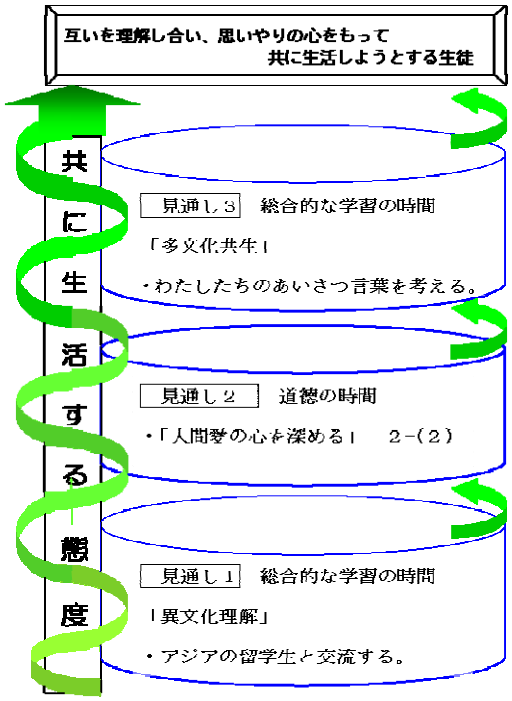
(2)「外国人生徒」「様々な文化をもつ生徒」について

本校には、日本人生徒のほか、ペルーやベトナム、中国などとかかわりのある生徒が在籍している。特に中国とかかわりのある生徒については、中国残留孤児等の中国からの帰国者の子女である生徒や、日本人と結婚した保護者と共に来日した生徒が在籍している。そのため、中国籍だけでなく、来日後日本国籍を取得するなど、一般的に言われる「外国人生徒」にはあてはまらない生徒が多い。しかし、これらの生徒も他の外国人生徒同様に、外国の文化のもとに生活している様子が見られる。また、本人や家族の日本語力の関係から、日本語教室に通級したり、日本語教育主任の生活適応指導の対象となったりしている生徒もいる。これらの実態から、国籍にかかわりなく「外国から来日した生徒や外国とのかかわりのある生徒」を、「外国人生徒」とし、日本人を含む本校の生徒全体を「様々な文化をもつ生徒」ととらえた。

(3)「見えない障壁」について

人間はなじみのないものに出会ったとき、警戒心や抵抗感を持ってしまう。そのため、日本人生徒には、日本の生活になじめない者は異質な者であり、かかわらないでおこうとする偏見が生まれやすい。また、外国人生徒は、そのような日本人生徒の発する積極的にかかわりにくい雰囲気を感じ取り、ますます消極的に学校生活を送る。このような両者の間に生まれた感覚的な壁を「見えない障壁」ととらえた。

2　全体構想図



３ 実践の概要

研究の見通し１の活動は２学年の活動として実践した。見通し２、３については２年１組（32 名）での実践とした。すべての結果と考察についても２年１組について述べることとした。

また、抽出生徒として、小学５年時に中国より来日し、現在日本語教室に通級しているＮ子を設定した。Ｎ子は来日後３年近く経過するが日本語の力がまだ十分でない。そのため、他の生徒は会話があまり通じず、行動も遅れがちなＮ子を敬遠する様子が見られる。Ｎ子もそのような状況の中で活動が消極的になりがちである。

(1) 国際交流に大切なのは分かり合おうとする思いであることが理解できたか。(見通し1)

ア　実践の概要

アジアからの留学生との交流会を実施した。本校では以前から実施していた活動である。今回は「留学生をもてなす」姿勢で取り組むことを強調することで、生徒がより積極的に留学生とかかわるよう準備の段階から意識付けを行った。この工夫により、日本の遊びやインタビューでは、積極的にかかわればかかわるほど言語の壁に突き当たり、大切なものは言語よりも分かり合おうとする思いであることに気付いていけるだろうと考えた。

開式後、留学生の文化紹介では各国の伝統的な踊りや歌などが発表された。続いて本校生徒が日本の歌の合唱や空手の型を、また、本校職員も加わって琴演奏を発表した。その後、班ごとに、本校生徒が用意した日本の遊びとインタビューを実施して交流を行った。さらに、閉式後には給食を一緒に食べ、日本や留学生の母国の料理、また、趣味の話などをし、より身近な雰囲気を楽しんだ。

資料 1「交流会の様子」

イ　結果と考察

各国の民族衣装で登場した留学生の姿や伝統的な踊りや歌に生徒は驚いていた。班ごとの交流では、留学生の日本語力や英語力には個人差があるため、会話が通じる班と、なかなか通じない班とがあり、開始当初は戸惑う様子も見られた。しかし、日本の遊びの活動に入ると、言葉での説明も必要なく、互いのジェスチャーや表情のやり取りで遊び方が伝わり、非常に活発な活動となった。その後の給食もジェスチャーや簡単な英語、日本語を交えながら、笑顔での食事となった。（資料１）

交流会後、「交流会で工夫した点は」と、「交流会で大切なことは」という点でアンケート（31 名）を実施した。（資料２）

資料２「交流会後のアンケート」

交流会で工夫したこと	
話すことに目を向けた生徒	
母国語、英語を使う	
ゆっくり、丁寧に、わかりやすく	
ちゃんと聞こえるように	
積極的に話す・話しかける	
声をかける	計20名

↓

交流会で大切なことは	
気持ち	
笑顔	
コミュニケーション	
顔で気持ちを表す	
やさしく接する	
尊重する	計16名
積極的に話す	1名
気持ちを込めて話す（伝える）	1名
話しかける	
言葉	各1名

交流会で工夫したこと	
心情、コミュニケーションに目を向けた生徒	
ジェスチャー	
相手の目を見る	
元気	
楽しいと思いながら	
遊び	
笑顔	
楽しんでもらえるように	
コミュニケーション	計8名

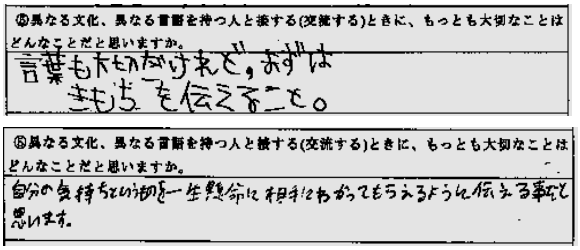
↓

交流会で大切なことは	
身体で表現する	
気持ちを伝えあう	
言葉がわからなくても怒らない	
差別をしない	
笑顔	
気持ち	
コミュニケーション	計8名

「話すこと」に目を向けていた生徒 20 名のうち、16 名は「気持ち」が大切だとする変容が見られた。その他２名が「積極的に」「気持ちを込めて」と心情を加えた「話し方」の大切さを書いた。

「心情、コミュニケーション」に目を向けていた生徒８名は、全員が大切なことは「気持ちなどの心情的なつながり」であることを挙げた。

資料3「交流会で大切なことは何か」


⑤異なる文化、異なる言語を持つ人と接する(交流する)ときに、もっとも大切なことはどんなことだと思いますか。
言葉も大切だけれど、まずは
きもちを伝えること。

⑤異なる文化、異なる言語を持つ人と接する(交流する)ときに、もっとも大切なことはどんなことだと思いますか。
自分の気持ちという物を一生懸命に相手にわかってもらえるように伝える事だと思います。

「留学生をもてなす」姿勢を強調したことで、生徒はより積極的にかかわらなければならなくなった。そのため、言葉でかかわることの限界に気付いたと考える。これらのことから、国際交流、

国際理解に最も大切なことは、単に言葉を伝え合うことではなく、気持ちを伝え合う、心情的なつながりであるということを多くの生徒が理解できたと考える。（資料３）

Ｎ子は、「積極的に交流できたか」という問いに対して、「よくできた」と答え、その理由を「相手は同じ外国人ですごく話しやすい」と書いた。Ｎ子が日本人生徒に対して言葉からくる疎外感を感じている様子が伺える。また、「交流に大切なこと」としては「あいさつと話」と書いた。彼女が日頃求めているのは気持ちという見えにくいものではなく、「あいさつと話」という、具体的に喜びを感じられるものなのかもしれないと感じた。

そこで、分かり合おうとする思いの基となる思いやりの心の大切さに気付かせ、心と心の結び付きを感じさせることが重要であると考え、見通し２の日本人と外国人との交流の様子を利用した学習へとのつなげた。

(2) 外国の文化に触れる日本人と、日本人をもてなす外国人の様子を通して、人間愛の具体的な姿が感謝と思いやりであることを学び、思いやりの心を持って他者とかかわっていこうとする意欲が高まったか。（見通し2）

ア　実践の概要

授業のねらいとする道徳的価値を「温かい人間愛の大切さに気付き、感謝と思いやりの心をもって、他者とかかわっていこうとする意欲を育てる。」とした。来日後間もなく、日本語の理解が不十分である生徒にもねらいが明確となるよう、映像を資料として本授業を構成した。

まず、テレビ番組「世界ウルルン滞在記」の食事の場面を中心に編集したビデオを資料とした。次に、「見通し１」のアジアの留学生との交流会と関連させることで、生徒の体験を振り返った。

最後に、「人間愛」の具体的な姿について理解させ、「言葉や文化が異なる人と接する時、あなたならどのようにして人間愛の精神を発揮しますか。」という問いで、今までの自分を再度振り返り、今後感謝と思いやりの心をもって他者とかかわることへの意欲付けを図った。

イ　結果と考察

日本人がお世話になった外国人に日本食を作る場面で感謝の気持ちを考えたときは生徒の反応がよかった。また、それが外国人の思いやりの心に対するものであることも理解でき、感謝と思いやりの心を深めることができた。

Ｎ子は、映像資料については他の生徒同様に興味深く視聴していたが、その後の学習活動では教師の発問に対して目立った反応はなく、他の生徒の発言を黙って聞いているという様子であった。

「今日の学習を通して考えたこと」では、思いやり、感謝、人間愛の大切さについての考えが深まったという生徒が多く、これらのことを前向きにとらえた生徒は 28 名いた。さらに、今回の学習で学んだことを「今後に生かしていきたい」という表現をしている生徒は 12 名いた。

資料4「今日の学習を通して考えたこと」

私は、今日の学習を通して、国際理解が大切だということを改めて感じた。国や言葉がちがっても、一生懸命話そうとしている気持ち思いは通じるんだなぁと思った。言葉が通じなくても、心と心が通じあえば、人間愛というのができると思った。
これからも感謝の気持ちと思いやりを大切にしたい。

資料が外国人とのかかわりを表現しているため、自然に国際理解、国際交流という外国人とのかかわりの中での人間愛として考えた生徒が多い。そうした中で、人間愛の対極にある差別や偏見にも目を向けた上で、ビデオの登場人物たちの互いを思いやる姿に具体的な人間愛の姿を見付けることができた生徒もいた。（資料４）

しかし、本校の特色である外国人生徒について触れている生徒は一人もいなかった。

以上のことから、本時のねらいは達成でき、意欲化は図れたと考える。しかし、自分の身の回りの現実に目を向け、改善していこうとする姿勢までは高まっていないことが考えられる。

資料5「人間愛の具体的な表現の仕方」（複数回答）

感謝や思いやりの心（人間愛）を具体的にどのように表現するか。（複数回答）	回答数
あいさつ・お礼	14
笑顔・態度・行動・形　・ジェスチャー	11
話す・声をかける	6
助け合う・助ける・優しく・大切にする・親切・気づかう・気持ちを伝える・好きになる・人のために	17

また、「感謝や思いやりの心（人間愛）を具体的にどのように表現するか。」との問いに対しては、

上記のとおりであった。（資料５）

「あいさつ、お礼」「笑顔、態度、ジェスチャー」は目に見える形でのかかわりを、また、「助け合う、優しく、大切にする」等は心情面でのかかわりを大切にしていると考えられる。また、「あいさつ、お礼」を挙げた生徒はかかわるきっかけを重視しているとも考えられ、その他の生徒はかかわり方の姿勢を重視していると考えられる。

これらの生徒の考えを総合すると、あいさつやお礼等をきっかけとしてかかわり始め、その後は話したり、声をかけたり、笑顔や態度、ジェスチャー等の目に見える形でかかわり合っていくことが大切だと考えていることがわかる。一方、そうしたかかわりの根底に、互いに助け合ったり、大切に思ったり、優しくしたりと、心情面でのかかわりが欠かせないものであることも見えてくる。

Ｎ子は、「今日の学習をとおして考えたこと・学んだこと」で、「そこの人たちはとってもやさしかった。そこへ行きたいなと思った。」と書いた。また、感謝や思いやりの心（人間愛）をどのように表現するかという問いに対しては、「人と人は助け合いが必要で、相手を好きになれば、また、相手も好きになってくれる。もしも、人間に愛情のある話がなくなったら、人間は憎しみに変わる。」と書き、人間愛の具体的な姿を「助け合い」によって表現したいと書いた。このことから、学習のねらいは伝わったと考える。また、助け合って生活したいという意欲をもっている点で、次に行う見通し３の活動は効果的であると考えた。

日本人生徒やＮ子についての考察からも、見通し３の体験型の学習の重要性が見えてきた。

(3) 日本人生徒と外国人生徒とが、言葉や文化の異なる自分たちにふさわしいあいさつ言葉を創り出すことができ、広瀬中で、共に生活していくために工夫していこうとする態度がもてたか。（見通し3）

ア　実践の概要

人権教育の参加体験型の学習活動を利用し、アクティビティを３つ設定して、学校生活での一般化に結び付けていくこととした。

アクティビティ①「Ａさんの誕生日」では、初めに「甘いものが好きなＡさんに贈るプレゼント」を考えた。続いて、「実際に、特定の人物に贈るプレゼント」を考える活動を行った。

アクティビティ②の「あいさつカード」の活動では、「こんにちは」「え、何言ってるの」「あはは」「ふん」「ハロー」「ニイハオ」など、様々なあいさつを言い合う。このことから、生徒は「あいさつは人間関係を良好にするものであること。そして、世の中にはいろいろなあいさつ言葉があってよいこと。しかし、拒否されると悲しく、嫌な気持ちになること。また、あいさつの中には、受け入れられないものもあること。つまり、あいさつ言葉はお互いや、周囲の人の共通理解があればどんなものでもよいこと」を実際の体験から学んだ。

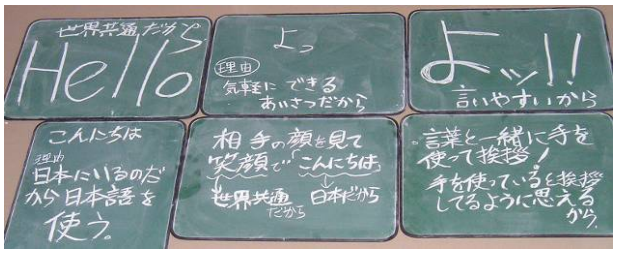
これらの活動の後、生徒の実際の生活への一般化を図るため、アクティビティ③として、外国人生徒と日本人生徒とが共に生活していくのにふさわしいあいさつ言葉とその理由を考えさせ、文化や考え方の違いを相互に理解し、共に生活していくために工夫していくことへの態度化を図った。

特に、学級独自のあいさつ言葉を作る段階では、学級委員を中心に話し合わせた。生徒自身が、共に生活していくために工夫するためのスキルを身に付けるために、学級委員を中心として話合いを進め、学級として意思決定していくことが重要であると考えたからである。

イ　結果と考察

アクティビティ③では、２年１組にふさわしいあいさつ言葉について話し合った結果、各班で下記のようなあいさつ言葉が創られた。（資料６）

資料6「各班で創られた『あいさつ言葉とその理由』」



これらを基に行った話合いの中で、Ｎ子から「『日本にいるのだから日本語を使う』というのは、日本語を使わなくてはいけないので窮屈な感じがする」という意見が出された。そこで、「では、『ニイハオ』がいいのか」と教師が尋ねると、「ここは日本だから日本語でもいいが、『こんにちは』と決められてしまうのは嫌だ。」と答えた。

「日本にいるのだから日本語を使う」と提案した班の日本人生徒に、「あなたが外国に行ってその国の言葉しか使ってはいけない状況になったらど

うか」と尋ねたところ、「やっぱり、嫌だ。」と答え、N子の気持ちを理解できたようだった。

また、「言葉と一緒に手を使う」ことについてN子は、「日本語が聞き取れないことや、分からないことがあるので、あいさつと一緒に手を挙げてくれると、あいさつしているのが分かるのでいいと思う。」と答えた。笑顔については、生徒の多くが笑顔でのあいさつは大切だという意見だった。

その後、学級委員を司会として、学級のあいさつ言葉を話し合った。その結果、

笑顔で（笑顔は世界共通）、
手を挙げて（あいさつしていることをはっきりさせる）、
『よっ』(気軽で言いやすい)と言う。（ｶｯｺ内は理由）

ことに決定した。N子の意見が反映した学級のあいさつ言葉が創り出された。（資料７）

資料7「あいさつ言葉決定の様子」

資料8「『学習を終えて』の分類」

多文化共生への態度	記　述　内　容	%
もてた	他文化共生・外国人生徒との関わり方について	57
	集団を高めるためのあいさつと他者との思いやりのある関わりの重要性について	27
もてない	あいさつの重要性について	16

学級のあいさつ言葉を決定するための話合いで、N子の意見を利用したことで、外国人生徒が日頃考えていることが明確となった。その結果、生徒の思考に「思いやり」という視点が生まれ、日本人生徒と外国人生徒とが、多文化共生のための工夫としてN子の意見が強く反映されることとなった。また、学級全体であいさつ言葉を考える観点として「理由」を重視したことで、「思いやり」の心が、「笑顔・手を挙げる・よっ」という言葉の「理由」に具体的に現れたと考える。授業後に書いた「学習を終えて」の記述を、前記のように分類した。（資料８）

多くの生徒が、多文化共生や外国人とのかかわり方について前向きな考えを見せた。また、単なる「あいさつ」ではなく、「集団を高めるためのあいさつ」「他者との思いやりのあるかかわり方」について触れるなど、多文化共生の要素も加わっていた。これも、アクティビティ３の学級のあいさつ言葉を創る活動で、外国人生徒N子の本音を素直に受け止めたことから生まれたものと考える。以上の点から、参加体験型の学習活動を取り入れたことは非常に効果的だったと考える。（資料９）

資料9「学習を終えて」

相手に言葉を伝える方法は限りがあるけれど、相手に自分の気持ちを伝える方法は人それぞれ違うと思います。なので、相手と自分がわかりあえるまで大変だけれど、その壁をのりこえた先に、本当の『多文化との共生』という事が成しとげられるのではないのかと思います。

いままでは、他国から来た人達とどう接していいかわからなく、言葉などをかけてあげる事ができませんでした。しかし、今日この国際社会という勉強を通して言葉じゃなくても心が通じ合える事が学べました。2年1組で決めた笑顔で手をつなぐ、明るく挨拶をしていき、来た人にとってよかったと思えるようなクラス・学校にしていきたいと思います。
また、日本だからといって日本語を使うのではなく、相手にとってまちがえやすくなる場にならないようこちらの事を大切にしていきたいです。

今回、私たちのクラスでは、「よっ」という形になったが、このようにして、自分たちで考えたことを「にちじょう」にとり入れていくことにより、他の国との境目も、うすれていくのではないかと思う。

資料 10「抽出生徒N子の『学習を終えて』」

あいさつを大切にした。おたがいの気持ちをわかれるように。話したり、自分の目で見えるようにする。
おたがいに優しくして気持がつたえるように。

N子は、あいさつ言葉を決める話合い活動で日頃の思いを学級の生徒に伝えることができた。その思いを他の生徒がくみ取り、創られたあいさつ言葉に反映されたことで、学級内での存在感や所属感を体感できたと考える。これは、見通し１、２でN子が願いとして見せてきた、思いやりを根底においた上での具体的に喜びを感じられるものであると考えられる。N子の「学習を終えて」の

記述にはその思いが記されている。(資料 10)

以上のことから、様々な文化をもつ生徒が互いを理解し合い、思いやりの心をもって共に生活しようとする生徒の姿が見られたと考える。

その後の学級の様子では、恥ずかしがりながらも、「よっ！」と声を掛け合う姿が見られたが、少しずつ聞かれなくなった。しかし、誤りや失敗をした生徒を温かく見守る様子や優れた活動をした生徒への素直な賞賛などが見られ、日本人生徒、外国人生徒にかかわらず学級生徒全員の距離の縮まりと思いやりの心の成長とが感じられた。ともに生活していくために大切な、一人一人を大切に思う心の育成は図れたものと考える。こうした活動で深められた多文化共生への思いや身に付けたスキルを様々な活動で生かせるよう、今後も指導を継続することや、よりよく工夫していく必要性を感じる。

Ⅴ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

○ 留学生との交流会は、言語を媒介としなくても気持ちを伝え合うことで互いに分かり合うことができることを理解させるために有効だった。また、道徳の時間に、言葉が通じない外国人と日本人との交流を資料として人間愛について学んだことで、様々なかかわり合いの根底には思いやりの心があるということを深めることができ、それを大切にしていこうとする意欲化が図れた。一方で、同じような状況が自分の周囲にもあるという身近な問題としての意識は低いという課題もでき、見通し３の活動につなげることができた。そして、見通し３の参加体験型学習の各アクティビティでは、アクティビティ後の振り返りで、体験を理解に転換することができ、最後のあいさつ言葉を創る活動が充実できた。また、見通し１、２での学びや、見通し３のアクティビティでの学びが、生徒の創ったあいさつ言葉への思いの深まりや多文化共生への態度化に効果的に作用したと考える。これらのことから、日本人生徒、外国人生徒が思いを通い合わせながら、集団生活の向上のために協力できることを理解できたと考える。

○ 見通し３で創ったあいさつ言葉は消えていったが、活動を通して深められた思いや身に付けたスキルが学校生活に生かされていく様子が感じられた。こうした活動によって、「見えない障壁」をなくしていけると強く感じた。今後も継続指導を工夫していきたい。

○ 一連の学習活動において、外国人生徒が日本人生徒からその存在を認められ、活躍の場面ができたことで、外国人生徒の学校生活が意欲的になった。このような活動を、新学期や外国人生徒編入の際に、学級や学年、生徒会の活動として積極的に取り組むことで、学校レベルの多文化共生の充実が図れるものと考える。

○ このような実践を積極的に行っていくことは、教師にとっても外国人生徒受け入れへの不安解消に有効であると考える。

2 今後の課題

○ 一連の学習活動では他文化共生への意欲が向上するものの、継続して指導していく必要性を感じる。そこで、見通し３で行った参加体験型の学習活動を積極的に取り入れたいと考える。そのために、多文化共生のためのより多くのアクティビティの開発も必要である。

○ あいさつ言葉を創る過程で生徒が身に付けた多文化共生のためのスキルを様々な場面で活用させる工夫も必要である。学校行事がその実践の場となるような指導計画も可能であろう。

○ 本研究は２学年で行ったが、１学年入学時や外国人生徒編入時の当該学級、学年等の実践等、実態に応じて系統的かつ臨機応変な計画実践の必要がある。

○ 参加体験型の学習活動を、小学生と合同で実施したり、中学生がファシリテーター（進行役）になって小学生に指導したり、小学校との連携も可能であると考える。また、このような活動を通して、地域での多文化共生への理解もより深まっていく可能性を感じる。

＜参考資料＞

大津和子　溝上　泰　編集　『国際理解重要用語 300 の基礎知識』　明治図書(2000)
レッスンバンク 10-2『あいさつゲーム』　ERIC 国際理解教育センター
「世界ウルルン滞在記」のビデオ　　ＴＢＳ

（担当指導主事　萩原　勝義）